

グローバル・フェミニズムズ：  
女性によるアクティビズムと学問の比較事例研プロジェクト

地域：日本

話し手：上野千鶴子

聞き手：殿村ひとみ

場所：トキヨ、ジャパン

日付：2022年5月31日

ミシガン大学 女性・ジェンダー学研究所

**(University of Michigan Institute for Research on Women and Gender)**

住所：1136 Lane Hall Ann Arbor, MI 48109-1290

電話：(734) 764-9537

メールアドレス：[um.gfp@umich.edu](mailto:um.gfp@umich.edu)

ホームページ：<http://www.umich.edu/~glblfem>



## 上野千鶴子

NPO 法人ウィメンズアクションネットワーク (WAN) 理事長 (<https://wan.or.jp>)。東京大学名誉教授。定年後、オンライン教室でセミナーを開講中 (<https://wan.or.jp/ueno#gsc.tab=0>)。社会学博士。日本におけるジェンダー、セクシュアリティ、家族、フェミニズム、家父長制、資本主義を研究テーマとしている。フェミニズム研究と女性学のパイオニアであり、著書、記事、社説多数。フィンランド共和国 Hån Honours 賞 (2019 年)、2020 年「アメリカ芸術科学アカデミー会員」への選出 (2020 年) など、国内外で受賞多数。

## Hitomi Tonomura (とのむらひとみ)。

米ミシガン大学歴史学部教授。米スタンフォード大学歴史学博士。専門は日本中世史、ジェンダー学、女性・男性史。『新ケンブリッジ・ヒストリー・オブ・ジャパン (I・古代中世)』や『中世後期近江惣村得珍保』の著編書、身分と性、武士の体とバイオレンスなどに関する英文論文のほか、日本語で「肉体と欲望の経路：今昔物語集に見る女と男」（『ジェンダーの日本史』東大出版）、「新ケンブリッジ・ヒストリー・オブ・ジャパンについて」（『アジア遊学』勉誠社）や「ジェンダー研究と歴史展示の課題」（『国立歴史民族博物館研究報告』）など。ミシガン大学ダイバーシティ推進プロフェッサーシップ授与。所長歴は日本研究センター、日本研究センター出版会、アイゼンバーグ歴史学研究所、アメリカン・カルチャー学部内アジア・パシフィックアイランダー・アジアンアメリカンスタディーズプログラムを含み、現在の研究課題はアメリカの基地文化と社会。

Hitomi Tonomura: それでは始めます。

Chizuko Ueno: はい。

HT: 質問は大体 6 種類ぐらいあるんですけども、その一つ一つの中で、もうちょっと細かい質問がありますので、でも適当に違う方面に行っていただいても全く構いませんので。はい。

1 番目ですけども、これまでの軌跡、今までこの半世紀に渡って”風を受けて先頭を走るフェミニストの旗手”などと呼ばれて、まさにフェミニズムの先駆者と謳われてきましたが、どのような経歴を経てこのようなご自分が今あると思われませんか。子どもの時から差別、性差別などは感じておられましたか。

CU: はい、その通りです。何が私をフェミニストにしたかっていうことを考えたら二つの理由があると思います。一つは私の育った家庭が非常にワンマンの亭主関白の典型的な日本の家父長的な父親だったということと、母親が専業主婦で、フェミニストが育つのもってこいの環境だったのは両親が不仲だったことです。それで、両親は恋愛で結婚しました。母はしたがって自分の夫選びを間違ったというので、誰も責めることができなかつたんですが、私は子供心に母をじっと見ていたある日、ふと気が付いたことがあります。お母さん、夫を取り替えてもあなたの不幸はなくなるよ。これは人格の問題ではなくて構造の問題なんだ。と思ったのが私が「母のような人生を送るまい」、母をロールモデルではなくカウンターモデルにした瞬間です。それで私は結果として結婚っていう制度にはまらず、今日に至るまで”お一人様”を通してまいりました。これが一番大きな理由ですけどね。

二つ目の理由はやっぱり学生運動の経験は私にとっては非常に大きかったですね。それはもうグローバルに非常に共通した私の同世代のスチューデント・パワー・ジェネレーションの共通の経験だと思いますが、同志だと思った男たちから、やっぱりあの日、あの時あの場でこんな目にあつた、あんな目にあつたっていうね、私は私怨がいっぱいあります。そういう意味ではあの体験が私をフェミニストにしたと思います。

HT: そういう体験についてはアメリカのフェミニストもよく言われることですよね。そこから、今の女性学とかいろいろなものが発展してきたということもあるのではないのでしょうか。

CU: 世界中どこに行っても、特にヨーロッパに行ってみたら、本当に新左翼系のスチューデント・パワー・ジェネレーションの女性たちが非常に共通の経験をしたということがわかりまして、そして彼女たちがウィメンズ・リベレーションとかウィメンズ・イマン

シペーションの一番最初の担い手になったという世界同時性っていうのがあったんだっていうことが後でよくわかりました。

HT: はい、そうですね。それでは今の上野さんの世代の方々はそのような経験を積んできたんですけれども、今の若い人たちはその 70 年代の学生運動の経験とかはないですね。ということは自分自身がどういう風に作られてきたかっていうのを考える場合に、今の若い人たちは随分いろいろな経験がないというか、どういう風にして今の若い人たちがフェミニストになれるのでしょうか。これはちょっと別の問題になるかもしれませんが、上野さんご自身のことを考えて、今までの人生を考えた場合、今の若い人たちには何かそういう機会とかがあるんでしょうかね。

CU: 今の日本の状況はフェミニズム・リポートと言っているくらい活況を呈しています。若い人たちがフェミニズムにあんまり危機感を持たなくなって、非常に積極的に活動しています。私はやっぱりそれは一番大きいのは世代が変わって少子化が進んだことだっていう風に思います。私たちの時代にはやっぱり子供が息子と娘が両方いたら、息子の方により大きい教育投資をする。娘は息子よりも学歴が低いという、こういう差別が家庭の中でも当然のように行われていましたが、今の娘たちは本当に一人娘か姉妹だけっていう、そういう家庭環境の中でとても大事に育てられてきています。学校にいた間は共学で男女平等ですから、あまり差別を彼女たちは感じていません。学歴も非常に高くなりました。その中で社会に出てみたら、こんなバカなことが自分の目に降りかかるということを経験していますので、私は彼女たちのそのトレランスのなさっていうか、こんな不当な差別に私が我慢する理由は何一つない、というこういう気分が今の若い世代の女性たちにある。別の言葉で言うと、我慢しない娘たちが育ったということだと思います。その我慢しない娘たちを育てたのは、上の世代の女たちで、上の世代の女たちは我慢してきたことによるルサンチマンを持ってる訳ですね。そうやって親の世代のルサンチマンが子供の世代に反映した成果だろうという風に私は思っています。そういう意味でその話がある時ジャーナリストにしましてですね、それで日本の女性の受忍限度が下がったと言ったら、それは後で記事が送られてきました。男性のジャーナリストでしたが、こう書いてありました。女の我慢が足りなくなった。全くその通りなんですけどね、そういう我慢しない娘たちが育ってきたっていうことを実感的に感じています。

HT: ということは、これからは男が我慢する社会になるんでしょうか。

CU: いや、男の子たちが我慢するかどうかはわからなくて、結果として男が変わらない限り、そういう変わらない男に我慢しない娘たちが出てきますので、結婚のミスマッチが増えて日本は結婚確率が下がり、ますます少子化の社会になるでしょう。

HT: はい、面白い話ですね。今、色々現代のことについてお話ししてくださいましたけれども、上野さんのご研究について、ちょっとお尋ねしたいです。今まで本とか論文とか、たくさん何十冊何百冊もあるいろいろなものを書いておられますけれども、読む側としましては、もちろんアカデミズム的な本もあるんですけども、それ以外にも大変読み易く、読んでとても楽しく面白く斬新な内容ばかりでとにかく読んで楽しいものばかりです。内容的には 80 年代から今まで、こうどんどんと変わってきていて、初めは私が気が付いたのは、要するにあの頃はセクシュアル・エボリューションみたいなものがありましたから、例えば、「スカートの中の劇場」とか、「セクシー・ギャル」とか、とにかくセクシュアリティに関する本が多かったと思います。それと、あとは資本主義、社会主義というものについて考えておられたようにこちらからは見えませんでした。今はちょっと変わった、例えば「お一人様」とかね、そういう本があるんですが、その書かれたもののテーマはどういう風にして選ばれましたか。その時期、その時期によって異なってきたと思います。

CU: はい、私は女性学に出会った時に目から鱗の経験をしました。それは自分自身を研究対象にしてもいいんだっていうことでした。学問の社会っていうのは、主観的であっては学問ではない。客観的・中立的でなければならないっていう、私は神話だと思っ

ているんですが、これが今でも流通しておりますので、女が女を研究すると主観的と言われたんですね。けどウィメンズ・スタディーズを日本に紹介した私たちの先輩の井上輝子さんは、これを女の女による女のための学問とはっきりと定義しました。その後、日本では 2000 年代になってからマイノリティーの人たちの当事者研究というものが大変大きく広がったんですね。当事者研究って英語で何て訳せばいいんでしょうかね。Studies on our own とか言うんですかね。自分自身の研究です。それを見た時に私はデジャヴュ感がありました。と言うのは、ああこういうことなら、私たちはもっと前からやってきた。今から思えば女性学っていうのは当事者研究のパイオニアだった。というので、自分自身を研究対象にするっていう風に考えた時には、20 代 30 代の年齢の私にとっては、セクシュアリティというのが非常にもう緊要な課題でした。性とか産むとか家族とか、そういう風なこと。産む産まない、あるいは家族を形成するしないということも含めて非常に切実な課題でしたけれども、順調に私も加齢をいたしまして、今高齢者でございます。そうするとやっぱり目の前にエイジングっていうものが登場してきた訳ですね。この経験はやっぱり私にとって切実な経験なのと、それと、塩梅よくっていか日本社会全体がエイジングしています。それと自分の個人的な課題と社会的な

課題がたまたま一致したという、そういう幸運に恵まれているという気はします。だけでも、あのちょっとこれは誤解を招く言い方かもしれませんが、私は学問を私利私欲のためにやってるんだって言うております。For self interest ですね。自分自身の切実な関心を追いかけていくと、それが他の方たちの役にも立つということが、たまたま起きていてありがたいと思っております。

HT: それから今おっしゃった「お一人様」とか、そういう感じのとても面白い日本の言葉を使って、本のタイトルとか、もちろん内容的にもですけども、ぼんぼん出てくるんですけども、さっきこの日本語は英語でどう訳しますかとかおっしゃいましたでしょう。「お一人様」、あの言葉も英語にはちょっと訳せないですよ。っていうのはお一人様っていうのは、例えばレストランに入った時に、お一人様っていうから、お一人様は社会的に通じる言葉なんですけども、英語で one person とか alone とか lone とか言ってもピンと来ないですよ。だから、とても英語に訳しにくい楽しい日本語がぼんぼん出てくるものがたくさんあって、そういうのは上野さんは敏感に言葉をどっかから見つけてこられるんですけども、あれはどうやってそういう風になるんでしょうかね。これはちょっとうらやましいから聞いてるんですけども。

CU: 殿村さんにこういう質問していただいて嬉しいです。こういう質問めったにされないの。時々考えるんですけどね、私、やっぱり言葉の持ってる衝撃力とか破壊力っていうのを感じるのはなぜかって言うと、若い時に短詩系をやっていました。俳句をやっていました。俳句ポエトでした。わずか五七五の十七文字の中に言葉を詰め込んで、そこでどうやって世界を読み替えるかとかね。世界に衝撃力を与えるかっていう訓練をやってきたっていうことが、もしかしたら関係があるかもしれません。だから、いくらか学問の世界に送り出した新しい造語があります。辞書には載っていない言葉ですね。それが例えば「当事者主権」という言葉とか、あるいは「選択縁」という言葉とか、「お一人様」もそうなんですけど、今、私は「在宅ひとり死」という言葉を広めようとしておりまして、孤独死と呼ばれたくないというので、割合そういう造語を作っていました。

HT: それは一つは社会学学者としても造語を作って、それによって、いろいろな論理的なことを皆さんに考えてもらおうということもあるんでしょうね。

CU: そうですね。概念を新しく作るっていうのは、その概念でなければ説明できない新しい現実が登場してくるっていうことですから。

HT: 素晴らしいことですね。次に、フェミニズム研究とアクティビズムとの関係ということについてお尋ねしたいんですけども、日本においては女性学、特に私は歴史をやっていますので、女性史という分野が 80 年代に台頭して、さっきもおっしゃいましたが、目から鱗が落ちるとかおっしゃってましたけど、それで多くの著書が出版されました、その当時に。アカデミックな活動とフェミニズムの発展とは必ずしもつながりがあるのでしょうか。ないとも言えると思うんですよね。ある意味で。っていうのは、前、女性史をやった方が、「最近の活動家は本当に迷惑な人間たちである」とかいうのをおっしゃってたのを覚えています。だから、上野さんからご覧になると、どういう風にその時は感じておられましたか。

CU: さすが女性史研究者として非常に鋭いご指摘だと思います。日本はですね、女性の研究サークルの歴史がものすごく古くて厚いです。女の人には自分のルーツを辿ろうとする時、やっぱり最初に歴史に向かいます。それでウーマンリブが生まれるもっと前から、日本には各地に地域女性誌とか地方紙とか、そういうローカルな女性誌の蓄積がいっぱいありました。これは素人女性史家たちです。民間女性史家たちですね。ところが日本の、史学会を当時支配していた 歴史観っていうのは、まあ唯物史観という、どちらかという、マルクス主義的な階級史観でした。その影響下にあった人たちが大半だったので、この人たちはリブの世代とは断絶しています。リブはそういうところからではなくて、さっき言った、むしろ旧左翼ですね、唯物史観を唱えた旧左翼を批判する新左翼系の女性の活動家たちの中から出てきましたので、人的にもあるいは学問の系譜の上でも断絶が起きています。その中で過去にそういう運動を蓄積してこられた先輩のお姉様方からウーマンリブが生まれた時に、日本でも 1970 年にウーマンリブが生まれましたが、その時にプチブル急進主義という—懐かしい言葉ですね—と呼ばれて、ご批判を受けたというこういう時代がありました。その後、女性学が非常に大きな発展を遂げたんですが、女性史研究者と女性学研究者との関係は、その後も長きに渡って決して良好なものではありませんでした。これがほとんど諸外国ではフェミニズムの影響を受けて女性史が発展したっていうところがあるんですが、日本の特殊性は第二波フェミニズムが生まれる以前に女性史が非常に厚みを持って存在していた。そのことがかえって新しい動きとの繋がりを阻害したっていう風に言えるかもしれません。

HT: それは大変面白い観点ですね。1910 年ぐらいですかね。男の歴史学の方々も女性史の論文をたくさん書いておられましたけれども、あの人たちは別にそのもちろんフェミニズムという言葉もなかったし、それがあの今の女性史学につながっているのか、どうかというのも一つの考えるべきことかなとも思うんですけども、今の男性の学者で、要するに例えば女性史とか別に女性史でなくても歴史でなくてもいいんですけど

も、社会学とかで。とにかく、そういったフェミニズムの要素の入ったものを書いておられる方々の数は、たくさんおられますか。

CU: 数っていうのは難しいですが、女性史が後にジョアン・スコットの影響でジェンダー史という風に展開しました。だから、そうなる、ある意味、女が女のことだけやっていうゲッターを抜け出しまして、史学会にほとんど必ずジェンダー部会がありますし、それからジェンダー歴史学会ができましたし、そういう意味では男性女性を問わず、歴史家の中でジェンダーを分析変数に入れるのが当然視されるような動向が出てきました。それは確実に大きな変化だと思います。

HT: とてもいいことですよね。それで前私も一つ論文書いたんですけども、ジェンダーという言葉が、今は知りませんが、例えば十年前とか十五年ぐらい前だと、あんまりよく理解されてないという印象を受けたんですが、いかがですか。

CU: それは当たり前です。その横文字言葉で殿村さんがおっしゃった通り輸入語ですからね。ただこれをずっと使い続けてきたせいで、最近ではこれはもう広く定着して普通の人の日常会話にも出るぐらいになりました。が、私はこれを聞くたびにいつも思うんですが、ジェンダーという言葉はもともとフラ語の **genre** から来ていて英語圏の人にとっても輸入語ですよ。ラテン語圏の言葉には男性詞女性詞ありますが、英語には男性詞女性詞ないので、もともとジェンダーのない言語ですね。私ちょっと一つだけ非常に忘れ難いエピソードを今聞いてらっしゃる皆さん方に紹介したいと思います。フランスのフェミニスト研究者とアメリカのジョアン・スコットが同席した場所で、そのフランスの研究者がスコットに対して、あなたたち英語圏の研究者にとってはジェンダーなんっていうのはもともと関係ない言葉だった。そんな縁のない言葉があなたたちの研究に何の関係があるのかっていう風に、とても意地悪な質問したんですね。その時その場にスピヴァクがいました。私とそのシンポジウムのコーディネーターをやっていました。そのスピヴァクの言った言葉が素晴らしい言葉だったんですね。どこで生まれた概念であれ、使えるもんなら誰が使っても構わないって言ったんです。

HT: とってもよい言葉だと思います。

CU: 使い甲斐のある分析概念なので、だからこそこれだけ広がったんだと思います。

HT: それは大変いいことだと思いますね。上野さんも、じゃあジェンダーが日本に到着してから勿論その前からそうかもしれませんが、ジェンダー概念を使って今は書いておられますか。どちらかと言うと。女性学の...

CU: ええ。はい。ジェンダーをタイトルに入れた本はいくつも書いております。

HT: だから、そのさっきおっしゃってたように、自分自身も変わっていくと考え方も変わっていくということですよ。

CU: つまり見方が変わるわけですね。だから女っていうとある実態を指すように見えますが、ジェンダーっていうのは性差の作られ方っていうことですから、だからまあ、ジェンダー研究は女性学と違って何が出来るかという、女がいるところでは女の研究ができますが、女がいないところではなぜ女がいないか、男はそこでどのように作られるかっていうことが研究できるっていうので、だから軍隊のジェンダー研究ももちろんできる訳ですね。だからそういう意味では、ジェンダー研究でやれない分野は存在しない。扱えない分野はないとまで言っている時代が来たと思います。

HT: そうですね。それで、こちらで言うマスキュリティ・スタディーズとか盛んになってきていますけれども、日本ではどうですか。そのマスキュリティ・スタディーズ。

CU: 最近、男性学は随分たくさん出てきました。しかも若い人たちが非常に率直に本音で自分を語るという、こういう著作が次々と出てきて、非常に良よい傾向だと思います。

HT: それは面白い。

CU: それから、韓国にもそういう男性学が出てきて、最近、韓国の女性学男性学の成果っていうのが、どんどん日本語に翻訳されてますので、非常に刺激的ですね。

HT: それは素晴らしいですね。はい、それではちょっと趣向を変えて、今のお仕事 WAN のお仕事についてお尋ねしたいと思います。この WAN はいつできて、どういう意図で作られたかちょっと説明していただけますか。

CU: はい。2009 年に成立して今年で十三年目です。WAN は悲しい出自を持っています。というのは、バックラッシュの最中に生まれたんですね。WAN は関西で生まれました。東京ではなくて。関西で生まれた大きな理由は、大阪府という東京の次に大きい都市の、この府知事に橋下徹というとんでもない右派の政治家が当選したせいで、ジェンダー政策っていうのが非常にもう締め上げられた訳ですね。そのことに危機感を覚えて、それだけではなくてその当時日本ではフェミニズムに対するバックラッシュが吹

き荒れていました。私たちも講演のドタキャンをされたり脅迫状を受けたりですね、本当に大変な思いをしました。2000年代はそういう時代でした。その時にその潰されかけた、元になった日本で初の女の本屋さんっていうのがあるんですが、それをどうやって守ろうかっていうので、もういっそのことバーチャル書店にしておこうというので、それとネット界にやっぱりネット右翼の人たちの方がプレゼンスが高かったんです。やっぱり、ネットは初期は日本全世界的に見て遅れていますが、2000年代に入ってからネットがようやく普及し始めましたけれども、その中で右翼の方がはるかにプレゼンスが高かったんですね。そしたらまず、もはやネットの世界に出ていくしか私たちの生き残る道はない。本当にコーナ―際に追い詰められて、背水の陣で打って出たというのがWANの悲しい出自です。反撃に転じたわけです。

HT: ネットウヨは確かに大変幅を利かせているという風に聞いてますけれども、あれはツイッターとかそういうところで見つけられるものなんでしょうね。私はツイッターをやっていないから全然わからないんですけども。

CU: あーそうなんですか。いや私も情報弱者だったんですが、ようやくネットの世界にだんだん通用してまいりまして、2000年代の私たちが始めた頃はですね、グーグル検索のこの検索窓にフェミニズムって入れたら、トップに出てくるワードがフェミナチだったんです。

HT: あー、すごい。

CU: そのぐらゐの状態でした。やっぱりこの状態は放置できない、と言うので、それと、もう一つ若い人たち見てたら、もうプリントメディア、彼ら読まないです。

HT: そうなんですよ。

CU: グーグル検索に引っかからないものはこの世に存在しないのと同じ。

HT: そうですね。

CU: ということがだんだんわかってまいりましたので、これはもう背水の陣を敷いてネットの世界に私たちのプレゼンスを作りあげようっていうのが私たちの決意でした。

HT: でもツイッターやってると、一日中それこそ24時間そればかり眺めるようになりませんか。

CU: まあそういう人もいますけど、私はツイッター遅く始めました。2011年に日本で阪神淡路...ごめんなさい、東日本大震災っていう大津波と地震が起きた時にですね、マスメディアの報道は信用できないっていうことを痛感して初めてツイッターを始めました。だから、ずいぶん遅いです。

HT: でも10年以上になる。

CU: 遅いんですが、でも絡んでくる人いっぱいいますけどね。リプライさえしなければ、発信ツールだと思ってたら、別になんてことないです。私たちの世代はね、嫌なレスは全部シャットダウンできます。でも、あの見てると若い人たちはね、自分のもう本当にエゴの一部がネット界にあるような感じでエゴサーチしないでいられないような人もいるみたいですが、ネットは使いようだと思います。

HT: そうですね。私ももう定年退職した後だったら、少しは見る時間があるかなと思いますけれども、でももう一日中、学生なんて授業に座っててもそういうことばかりやってる人が多いですからね、今はね。

CU: あと、それとですね、私たちが目指したのは、やっぱり女性の情報のポータルサイトなんですね。こういうもの、WANのようなものが他の国にありますかっていろんな方たちに聞いたんですが、アメリカはありますか。

HT: 色々なものがあるので、そのWANに匹敵するものがあるかどうかっていうのは、どうでしょう、無いんじゃないかなあ。

CU: あまりあるっていうお答えは聞かれません。というのは、私たちの業界でもね、フェミニストのアクティビスト団体はイッシュー別にいっぱい色々細かくあります。ご自分たちはホームページを作っておられます。だけど、それは自分たちの内部で閉じているので、それを横につなぐ。だから他にどういうものがあるって、それがどんな風に繋がっているかっていうことが見える化するサイトっていうのは、やっぱり滅多にないですね。WANはそのジャンルを超えていますので、そういう女性のためのオルタナティブ・メディアを作りたいっていう気持ちがありました。

HT: 日本ではどうやって皆さんにこの存在を知ってもらっていますか。

CU: フェミニストのネットワークって、割合それ以前からできてるんですね。日本にはアメリカのNOWのような巨大な全国組織はありませんけれども、割と小さい団体が横に繋がっていて、何かあるとそれがアクティベートするというような構造ができ上がっ

ているんです。メーリングリストもありますし。ですから、それが繋がることによって、まあ色んな、例えば選挙の時には一定のアクションを起こすみたいなことができるようにはなっています。

**HT:** それは選挙に関しては色々とお尋ねしたいこともあるんですけども、ちょっとそれは後において、今の **WAN** の将来については、どのような希望がありますか。

**CU:** あの、でもちょっとその前に、情報弱者であった私がこのネット事業を始めて大きく学んだことって、やっぱりね。

**HT:** はい、教えてください。

**CU:** ネットと動画の威力はすごい。それで、私たちが今財産だと思ってやってることの目玉が二つありまして、一つは消えてゆく女のミニコミの電子アーカイブを作っています。お姉様方がだんだんお年を召すので、それまでいろんな女性史研究会とかも含めたミニコミが休刊終刊していくんですね。それはもうその方がいらっしやらなくなったら、もうゴミのようなものなので、それを散逸する前に電子化してアーカイブ化するっていう。その時にお姉様方、IT ご存じないので、PDF って何ですかっておっしゃいます。そこからご説明して、著作権問題をクリアしていただいているんですが、大変最近ありがたいことが増えてきました。殿村さんの先程のご質問にあった通り、70年以降の日本のリブ以降の新しい女性の運動と、それ以前にあった女性史の様々なサークルの間には断絶があったんですが、その各地方の地域女性史の方たちが自分たちの記録を残してほしいと向こうからおっしゃって、私どもの電子アーカイブにそれを届けてくださるようになりました。本当にありがたいことで、だから、私たちは本当に先輩方の貴重な財産ですから、そこで将来の女性史研究者にとっては第一級の歴史資料になりますので、公的機関はこんなことやってくれません。私たちしかやりません。だからこれは本当に大切にお預かりしてアーカイブを作るということをやっています。ちょっとこれは長くなったら編集していただいたらいいんですが、私がそこに懇願して入れた三つのミニコミがあるんですね。それが何かって言うと、ミニコミの古典中の古典。一つは森崎和江さんの無名通信です。ご存知でしたでしょうか。

**HT:** 聞いたことありますけども、ちゃんと読んでないですね。

**CU:** それがちゃんとアーカイブに入ってます。ダウンロードできますから見ていただきたいのでね。ガリ版手刷りの創刊号に何書いてあるか、なぜ無名かって言うとね、私たちは妻・母・主婦・娘等、様々な名前と呼ばれてきました。その名前を全て返上したい

のです。無名の女に帰りたいのですっていうのが無名通信の件なんです。感動的な言葉なんです。それをご本人の許諾を得て、いただきました。それと、二つ目は山崎朋子さん。サンダカン八番娼館を書かれたあの方のアジア女性交流史。これも全巻いただきました。

HT: すごいですね。

CU: それともう一つは、石牟礼美智子さんが関係しておられた高群逸枝雑誌。で、これを出した方は高群さんの夫の方だったんですが、この方は亡くなっておられて、そのご遺族の同意を得て、これも全巻頂きました。こういうことをちゃんと地道に蓄積していくっていうのは他の誰もやってくれないので、私たちがやるほかないと思ってやってきました。これがひとつの財産になってます。

二つ目は何かって言うと私たちの世代のですね、ジェンダー研究者の第一世代、パイオニア世代がこうやって、もうみんな引退をしていってるわけですね。アメリカはどうかわかりませんが、日本の大学は定年がありますので、定年退職する教師には最終講義っていうのがあるんですね。その最終講義っていうのが、めちゃくちゃ感動的なんです。研究史と個人史と社会史、これが三つないまぜになって、しかも生涯一回でしょう。これは昔はテープにとって、テープ起こしして、誰も読まない紀要に印刷して配布してたんですが、私はある時ふっと思ったんですよ。生で動画残せばいいじゃん。これを動画で今最終講義アーカイブ作ってます。相当データを蓄積しました。すごい迫力です。どの人のを聞いても感動的です。

HT: それは、あの誰でも聞けるんですか、見れるんですか。

CU: もちろんです。私たちは完全にアクセスフリーで無料で提供しています。こういうことを地道にやってきたんですが、この作業ですね、私たちは本当に会費と寄付だけで、それでそれを支えてるバックヤードで働いてる人たちは、私を含めて理事長以下全員無償のボランティアで働いています。専従職員一人もおりません。

HT: それはどっかのファンデーションから、なんか資金がもらうとか、そういうわけじゃなく？

CU: いいえ、まったくまったく頂いておりません。

HT: それは意図的なものですか。

CU: いえいえ、私たちは努力しました。企業から。子どもとか福祉とか環境には彼らはお金を出しますが、ジェンダーにはほとんど出してくれません。

HT: それは凄い大きな問題ですね。海外の団体なんかはどうですか。あのお金くれないですか。海外支援団体は。

CU: 海外ですか。どうでしょうか。海外の団体にまでアプライしたことはありませんが、海外の団体の方たちからは日本の団体ってお金持ちなんだろうって思われてるでしょうから。

HT: Japan Foundation とか、そういうところは？

CU: 全然無理です。ああいう...政治系は出してくれません。

HT: そう! そうですか。それは社会的な問題ですね。そういうところは。

CU: それで、じゃあ将来何を望むかについては、私たちはなぜこれをやっているかっていうと、女性のいろんなアクティビズムを横に繋ぎたいけども、同時に縦にもつなげたい。っていうのは、世代を繋ぎたい。でも歴史になりつつある女の人たちの活動の記録というものをレガシーとして次の世代に手渡したいという気持ちがとても大きいです。もちろん向こうが受け取ってくれなきゃ、こんなもんいらないうて言われたら終わりなんですけどね。でも、気が付いた時にそれがなくなっていたということがないように、ちゃんとやっぱり記録を残しておきたいという気持ちはとても強いです。だから、これは、やっぱり長期に渡って継続してほしいプロジェクトだと思っておりまして、サステイナビリティを考えております。先輩のお姉様方からミニコミの資料を預かる時には、私どもが半永久的にお預かりしますって言いながら、ちょっと自分の口から言いながらね、半永久的ってどのぐらいだろうねとかって心配になりますけどね。でも、おかげさまで、とてもよいことがわかりました。私たちのサイトをですね、国会図書館とスタンフォード大学のライブラリーがこれを保存してくれています。

HT: そうですか。それは良かったですね。

CU: はい、とても。バックアップがあるのでとても安心です。

HT: それは本当によかった。あのデジタルのものはもちろん半永久的に保存できるという風に我々は思っていますけれども、私が時々本当にそうなのか。いろんなプログラムがしょっちゅう変わるじゃないですか。で、そういう時になんかすぐに臨機応変に新し

く自分たちが持っているものも変えなければいけないとかね、そういうことがあるかもしれない。将来的に。

CU: おっしゃる通りです。テクノロジーの発展、凄くスピードが速いので、今サイト作ったら寿命は五年って言われてます。私たち今十二年の間にサイト・リニューアルをプチ入れて二回やりました。今ちょうど、今のサイトが五年目ぐらいに入っているんで、そろそろリニューアル考えなきゃいけない時期です。ランニングはですね、皆さんボランティアで走り回ってくださっているんで、コストはあまりかかりませんが、リニューアルの設計と実装のために、ものすごい巨額のお金がかかります。そのために今備蓄をしてキャンペーンしてるっていうそういう状況なんです。ただ国会図書館なんかはね、本当にデジタル化したものをソフトが変わるたびに読み替え読み替えってことをやるっていうようなことをやっておられるので、私たちもまあバックアップしてもらえることは大変ありがたいが、自分たちでもデータをトランスファーしながらちゃんと保存しておくっていうことは考えています。

HT: そういうことをやってくれる人材はちゃんとあるんですか。

CU: テクノロジーの部分は外注しています。それはちゃんと IT 企業に。ただし NPO 値段で。とてもじゃないけど、やっぱりそれだけの技術的なサポートは私たちの力量ではできませんので。

HT: そうですね。大変ですね。

CU: そこは有償です。

HT: その WAN の活動においてフェミニズムという単語は出てくるんでしょうか。そのフェミニズム概念に関してはどういう風に考えておられますか。

CU: 初期の頃はですね、どんな人でもアクセスができる、できるだけ敷居の低い、「フェミニズム隠し」って言って、フェミニズムって言ったらみんな腰が引けて、フェミ隠しってやるつもりでいたんですが、さる方から、衣の下から鎧が見えてる、見え見えのがちフェミだって言われまして、それをやめました。敷居が高いって言われても、やっぱりガチフェミでフェミニズムの中でちゃんと信頼のできる情報を送り出そうっていう風になってやっております。

HT: じゃ、ちょっとそれに関連してですけれども、そのフェミニズムという言葉はアメリカでもそうかもしれないけど、あんまりよく思われてこなかったですよ。日本では。それがフェミニストだって言いたくない人の方が今でも多いでしょうか。

CU: あのね、やっぱり世代が変わりました。私たちの世代はパイオニア世代で、色々叩かれたりひどい目に遭いまして、その次の世代は私たちの背を見て、やっぱりフェミって名乗るとあんなひどい目に遭うんだねっていうことを学習して、それを避けて通るっていう風に振る舞った方たちが相当いらっしゃるっていうのがあります。その次の世代は、ある意味ですね、フェミニズムがバッシングを受けたことに対しても無知。そのぐらい知らない。彼ら彼女たちは割合ためらわずフェミニズムとかフェミニストとか名乗ります。それはどこから学んだのって聞いたらとても残念な答えが返ってきます。エマ・ワトソンとかね。エマ・ワトソンの国連スピーチですよ。あるいは、韓国フェミニズムからとかね。

HT: 日本からではないということですね。

CU: ちょっと待ってよ、あなたね、日本にもちゃんとフェミニズムがあったんだからっていう、それを広める役割を私がやっております。はい。

HT: じゃあ、もう殆ど一時間になりましたけども、あのそうですね、国内の女性運動とのつながりとか、または国際的な運動ジェンダー運動とかフェミニズム運動とか研究とかの繋がりをご自身として、どういう風にして今は考えておられますか。何をするのに意義が一番あるんでしょうか。

CU: 国内で言うそうですね、先ほどの質問にきちんとお答えできなかったんですが、私は女性学・ジェンダー研究というものはフェミニズムという運動の理論的な武器である。だから運動に役に立たない理論は意味がないと思っているので、だから理論と実践は車の両輪。ジェンダー研究とフェミニズムも車の両輪だと思っています。ただそんな中でいささか心がかりなのは、私たちの世代はアクティビズムと非常に関係の深い研究者が多かったんですけれども、次の世代、ある意味女性学ジェンダー研究が制度化して学知の再生産のサイクルに入ると、次の世代の女性の研究者たちが、いわば偏差値エリートの中から生まれてくると言う。だからアクティビズムとリサーチとの間にいささかの距離が生まれてくる可能性があるっていうのが気掛かりではありますが、それでも今これだけアクティビズムの高まりがありまして、日本でも **Me too** 運動は結構盛んになりましたし、今、性暴力に対するトレランスは日本でも非常に下がりました。ですから、そういう傾向が出てきますので、私たちのやってる **WAN** というポータルサイトそ

のものが、国内の様々なアクティビズムを横ぐしで繋いでいくっていう役割を果たすつもりでおります。それともう一つやっぱりそのウェブ事業がすごくいいのは、これが生まれたのは関西なんですね。

HT: はい。

CU: 東京じゃないんです。やっぱり東京の人たちって割合東京が日本だと思ってるところがあって。日本も広いですから、ローカルな情報発信ですよ。どこから配信しても構わないっていう。中央だけが日本じゃないっていう、そういうことも意識的にやってきました。だからオンラインは本当にアクセスが全国から、あるいは全世界からできますので、私たちにとっては非常にメリットがありました。それと、もう一つは国際的に言うと、WAN は最初英語ページを頑張って作りました。っていうのはやっぱり英語でグーグル検索してもらって、引っ掛からないと、やっぱり世界的には存在しないも同然になるからです。だから、英語ページ...だけど、これも完全にボランティアですので、内容を全部英語に変えるなんてことを人に命令することはできませんから、ボランティアの方がこれは翻訳に値すると判断なさったものをどうぞ翻訳してくださいっていう方針でやってきました。今これが急速にマルチ言語化しています。多言語化しています。これを率いているチームがワールド・ワイド・ワンっていう名前のチームなんですね。私はこのチームの成立に立ち会いました。その時にご本人たちが侃侃諤諤の議論をしておられるんです。このチームをイングリッシュ WAN とは名付けない。なぜならば英語はたまたまリング・フランカになったけれども、私たちは英語国民にメッセージを伝えたいのではない。英語というツールを使って世界に発信したいのだ。だから英語をイングリッシュ WAN と呼ばない。ワールドワイド WAN と呼ぶ。したがって、そこに出す英語の翻訳の記事もネイティブチェックを受けないという。もう何ていうか素晴らしいラディカルな議論を皆さん方がしておられて、そういうスタートを切ったチームがあります。そのチームが今急速にマルチリンガル化しているので、私は本当にこれをイングリッシュ WAN じゃなくてワールドワイド WAN にしといてよかったなと思うんですね。私のやっぱり野望というか希望は、その中でせめて中国語とハンガルの三か国語ぐらいは確実にちゃんとやっぱり確保しておきたい。東アジアの女性の状況っていうのは非常に共通点が多い。違いはあるけれども、その違いと共通点っていうものをお互いに学び合えるような、そういうシステムができればいいなっていうのが今の私の希望です。

HT: 素晴らしいですね。それでは最後に今の日本。今の日本の例の何ですかね。あれ。日本語でなんて言うのか知りませんが、122 番ですか。150 カ国の中の 122 番。

CU: ジェンダーギャップ・インデックスのグローバルランキングですね。

HT: そうそう、あの数字ですけれども、あれを見ると、もちろんこれはかなり問題のある国だなとか思うんですが、その反面、日本における女性の地位っていうのは、その彼らたちが使うあの方法で考えなければ、いろいろと高い部分もあると思うんですよ。例えば、セーフティ、治安。アメリカと比べますと、もちろん銃の数の少なさとか。もちろん性犯罪は色々ありますけれども、だけど、色々な面で女性がそれほどひどく扱われていないということも多いと思うんですが、その分野的に見ると。その辺は上野さんはどういう風に考えておられますか。

CU: いや、必ずしもそうは言えません。例えば日本は半世紀前と比べると確実に女性の状況はよくなってきてます。だから私がジェンダーギャップ・インデックス 156 カ国中 120 位っていうのを皆さんに説明する時には、日本がどんどん悪くなってるのではないです。徐々に良くなっているが、変化のスピードが低すぎるので、諸外国にどんどん抜かれているんだという風に説明しています。実態はわずかに良くなっていると言えるけど、実態は殿村さんがおっしゃる程良くありません。外国におられたらそういう風に言いたい気分ってとってわかるんですけどね。

HT: 特にアメリカにいるとですけどね。

CU: わかります。わかります。けども、例えば性暴力とか DV だってね、表に出てない暗数考えたら、日本は少ないとは到底言えませんし、それから家庭内の子どもの性虐待もどんだんだんだ表に出てきてますし。それと、もう一つやっぱり賃金格差が埋まりませんし、女性の就労の条件は改善されませんし、それから最近リプロダクティブ・ライツ・ヘルスっていうことが言われてる中で、女性の避妊の方法が世界的に見ても極めてガラパゴス化していて、旧式で古くて危険。緊急避妊ピルも解禁されてないとかね。あるいは、中絶の方法は確かに中絶アクセスは日本は相対的には容易ですが、なんかでもアメリカはまた中絶禁止になりそうな気配があるんですけど。

HT: 今、今すごいです。その通りです。中世に戻ってます。

CU: アメリカって本当にびっくりするような社会ですね

HT: だから今言ったことはそこから言ってるんですけど。

CU: けども、例えば日本は確かにね相対的に中絶アクセスが容易ですが、だけど例えば世界的に見て物凄く古い搔爬法という野蛮な方法が普及していて、もっと簡単な安全

な服薬法、薬の方法とかあるいは吸引法みたいなものが普及してないとか、そういう意味でガラパゴス状態だっていうことが、もうどんどんどんどん比較によってバレてきましたんで。だから、そういう意味では本当に改善すべき点は山のようにある。

HT: それは確かにそうですが、アメリカに住んでると、やたらと日本が天国みたいに見えることが多いんですよ。色々と。

CU: 夜中を、夜道を女が一人歩きできるっていうのは、そういう意味で本当に天国ですね。

HT: そうでしょ。それで、それは自分の人権に関わることであって、よくアメリカでは、**Constitutional rights freedom** とかなんとかいうんですが、それは自分たちがどれぐらいいろいろな危険性のために拘束されてるかっていうのがわかってないような気がして。日本がね。...猫が来ました。

CU: 海外に出ると、日本人が水と安全はタダだと思ってるっていうことが、どれほど例外的で特殊なことかってことがよくわかりますね。それから安全っていうことで言うと、確かにあの日本は夜道を女性が一人で歩ける社会ですが、ただし沖縄ではできません。

HT: そうですね。でもそれはアメリカのそのミリタリーのおかげですかね。

CU: はい、その通りですね。

HT: それも一つ考えなければいけないことだと思いますけれども。それではもうそろそろ時間ですが。何か一言最後におっしゃってください。日本の女性運動とかフェミニズムとかそういうことに関して世界の皆さんに知ってほしいこととかありますか。

CU: これは記録に残すためのドキュメントですよ。

HT: はい、そうです。

CU: 私も歴史になってしまうのでしょうか。

HT: 歴史の一コマです。

CU: でもそういう意味でも、私はやっぱりこの年齢になりますと、既に高齢者ですから、自分の今の役割はその生き証人として、前の世代のお姉さま・おばさま方から受け継いできたものをちゃんと次の世代に手渡すことだという風に感じています。日本の女の人たちも、やっぱり長期に渡ってあの長い長いストラグルをやってきたその成果っていうのがあるわけですから、それをちゃんと受け継いでいく、いきたいっていう風に思ってます。どの社会にもそういうレガシーはあるのでね。そのレガシーはその社会の生んだ固有のものだと思います。それを横につながって連帯するのは、それは素晴らしいことだけれども、その固有性を失わないっていう、例えば、私ちょっとウクライナのこと言っていていいでしょうか。日本のフェミニズムの大きな特徴として、私はやっぱり平和主義があると確信しています。それは今 NATO の拡張と、もう一つ、NATO の拡張の条件に私が聞いてびっくりしたのは軍隊の女性比率を上げようという命令が NATO から来るんだそうですね。そうすると軍隊の女性参加を認めるかどうかっていうことが NATO 参加を求める国のフェミニストたちの踏み絵になっていく。じゃあ、女も自由をとって人殺しやるのかやらないのか。で、そういうときにウクライナのような国で、女性も銃を取って戦うことが正しいのかどうかっていう、こういうのを目の前に私たちは見せられてるわけだけれども、私たちはやっぱり女が軍隊に参加するよりも、たとえ理想主義と言われても、軍隊のない社会をつくりたい。今こんな風に世界中に危険が切迫しているので、軍事費をありとあらゆる国が増やせと言っている。日本も言っている。アメリカも言っている。その時に、やっぱり「ちょっと待て」を言いたいという気持ちは日本のフェミニストには非常に強いと私は思っています。それはやっぱりあれだけの犠牲を出した敗戦国民だということのレガシーだと思います。

HT: それはアメリカの一般的な考えとは反対、正反対だと思います。というのは、女性が入るということは、それは equality という風に、軍隊に入るということは equality を意味するので、除外するのは悪いということ。ここ何年間のその女性のいる率とかね。色々と統計も出てますけれども、増える方がフェミニズム的にはよいという風に考えられていると思うんですよね。一般的には。

CU: はい、おっしゃる通りです。それは日本でもフェミニストとの間でも大きな論争を招きました。平和主義者が多数派です。日本では幸いなことに。

HT: そうですね。今はどういう本を書いておりますか。

CU: 今ですか。今、私の課題は認知症で最後まで在宅で一人で死ぬるかというのが、それが私の課題でございます。本当に目の前にある切実な自分事ですからね。

HT: 同感です。まったく同感です。

CU: 本当にあの非常にインテレクチュアルな知識人の方もちゃんと認知症になられますので。脇田春子さんご存知でしょう。

HT: はい、亡くなられましたよね。

CU: あれほど素晴らしい知的な、能力があって好奇心が強いあの方がちゃんと認知症になられました。どなたが認知症になるかは全く予想が付きません。明日は我が身です。その認知症の患者さんが受ける処遇は今何かというと、拘束か薬漬けで悲惨な状態です。

HT: それは悲しい。

CU: で、それをされずにすみたい。そして施設に入らずにおうちにいたい。どうしたらそれが可能だろうか。そういう社会をつくりたいというのが私の今の課題でございます。

HT: その次の本が出版されるのを楽しみに待っております。今日は長い間どうもありがとうございました。

CU: こちらこそ。とても楽しかったです。

HT: まだどこかで会いましょう。

CU: そうですね。

HT: はいはい、ごめん下さい。

CU: 失礼いたします。